

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Malrauxのfraternitéについて(その2)
Author(s)	林, 道恵
Citation	フランス文学, 4・5 : 57 - 62
Issue Date	1963-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040857
Right	
Relation	



Malraux の fraternité について (その2)

林 道 恵

まえがき

主題については、さきに、マルロー André Malraux の「征服者」, 「王道」, 「人間の条件」, 「希望」(本稿でもそれぞれ C. VR. CH. E. の略号で示す) の四つの小説を通じて、友愛 fraternité に関する若干の問題を考察し、それを本学会中国・四国支部機関誌「フランス文学」第二・三合併号(1961)に発表した。

その要旨を概説すると、まずマルロー文学の中における「友愛」の位置づけを試み、友愛という言葉 fraternité (fraternel, fraterniser) の使用回数を各小説別に示した後で、CH の前段までは友愛の芽生期だと推断した。次に、CH の後段の Kyo と Katow の友愛に関する盛り上りに言及し、E では友愛が諸人物の活動源になる点を明らかにした。また、友愛は虐げられた大衆が目覚めて胸にいだく「憎悪」にその根源をもち、屈辱の反対が友愛にほかならない点を指摘した。さらに、「敵味方を越えた友愛」, 農民が示す「積極的協力の友愛」, 「階級や国境を越えた友愛」を具体的な例をもって示し、最後に友愛が世界的な規模にまで発展して「普遍性」をもつにいたる点を強調した。なお、全体を通じて友愛の個々のケースを「経験」と「意識」のいずれかに色分けして理解を深めようとした。以下これを「前稿」と呼ぶことにする。

I

本稿では、その後に発表された「アルタンブルのくるみの木」^① (以下略号 NA で示す) について、同じように友愛の問題を考察することにしたい。しかし、この問題は、前稿で論じつくしたわけではないので、本稿の考察を進めて行く間に、時に応じて前稿で述べた問題にもふれて、より深い理解に達したいと思う。

最初に、前例によって友愛の用語 fraternité, fraternel, fraternellement をこの小説 NA の中から拾って、それを註^②—^⑩に掲げた。それによると、NA の中にはこの種の用語が前後10回現われる。この小説は、特に対話の章では形而上的問題が頻発して、前稿で扱った冒険、革命、内戦に関する小説とはいささか趣を異にしている、より難解であるが、前稿の例にならって強いて友愛を「経験」と「意識」に色分けをすれば、^③, ^⑥, ^⑨が「意識」の領域に入り、他は「経験」の分野に止まるといえよう。さて、これら10の引用の中から特にその内容を取り上げて考えたいのは次の諸点である。

もともと、この小説は、1940年シャルトル Chartres の捕虜収容所における語り手「わたし」の経験、回想、考察(第一部、第三部)と、かつてコンスタンティノーブルの大学に奉職するとたちまち、若いインテリ層の間に友愛に満ちた信望^⑤を集め、

各地で活躍して帰国し、さらに1915年の独露戦に参加して「人間との出合」というメモを残した「わたしの父」の経験（第二部）から成立している。そして、「わたし」は父の「人間との出合」と自己の「人間との出合」とをつき合せて考えるという仕組みになっている。

「わたし」は、シャルトルの捕虜収容所で、去り行く長靴の音と負傷兵達が看護人を呼び求める声との間にも友愛の部分を見つめ直しを発見してみじめさを感じる^④のである。

ところで、マルローは、前稿と本稿で扱った一群の小説を発表した後に、転じて「芸術心理学」(1947—1949)、「沈黙の声」^⑤

(1951、以下略号 VS で示す) など一連の芸術に関するエッセイを発表している。しかし、芸術に関する論考は、本論の範囲に限っていえば、1930年発表の小説 VR あたりからすでに、断片的ではあるが、その作品のあちこちに述べられている。マルローは、さきに述べた NA の形而上的対話の中でも、「偉大な芸術家は、その人物のある行為をえがくと同じ方法で、時間的にも空間的にもわれわれから非常に遠くかけはなれた運命 *ces destins* をわれわれに近づけ、親しい *fraternels* ^⑥ ものにし、秘密を解きあかすよすがともしてくれる」と論じている。

ちなみに、芸術作品に対するマルローの態度ないし考え方について一言すれば、さきに引用した「沈黙の声」では、古今東西にわたり、特に歴史の余白で発見されるあらゆる傑作が、時代、国籍、流派など一切考慮せず、その空想美術館に混然と集められている。そしてそれらの傑作は、著者マルローの讚美のうちに期せずして、幾つか

の星座を構成し、そこから「諸星座の歌」がわきあがるのである。すなわち、ここでは、もろもろの傑作は、王者の独白ではなくて、不屈の対話 *dialogue invincible* を止めようとしなない (VS p. 67) ののである。つまり、マルローにあっては、小説の人物が神をはなれ主義主張にとらわれず純粋な友愛で結びついて行動するばかりでなく、芸術作品さえも、彼の心眼にはあらゆる属性を超越して、自然に結びつくといえる。換言すれば、個人主義的な独白、独行、独走、独裁ではなく、常に相寄り相助け連帯の絆—友愛で結ばれるといえよう。そして、そのこと自体は、マルロー文学の全体からみれば、目的ではなくて、有効にして強力な一つの「方法」だといっても過言ではないであろう。

さて次に、「わたしの父」は1915年の戦争で、ロシア軍の陣地に対するドイツ軍の毒ガス攻撃に立会う (NA p. 182—p.245)。その情景は後で述べることにして、註の⑦から⑩までがそれに関連するので、その中で特に⑨について考察してみよう。すなわち、毒ガスに侵されて気絶したロシア兵を担いだそのなまなましい感覚がまだ肩や腕に残っている父は、他の連中が同じようにロシア兵を担いで帰えりつくのを眼前にみて、「これは果して同情だろうか——否、それとは似てもつかない深い衝動 *élan* である。その衝動の中で苦悩と友愛が入り乱れて結びつくのだ」と考える。もともと、人間の奥底は苦悩 *angoisse* (CH Ed. Gallimard p. 180) にほかならない。マルロー小説の人物はすべてこの苦悩を抱えていて、上の引用ではその苦悩と友愛が結びつくのだと解される。

他方、この小説 NA の終り近くには、他の小説でもときどきみられた悦の集大成ともいえる悦がみられる (NA p. 289). そのような悦と友愛の関係については、前稿の CH の Katow のケースを想起したい。彼は、自殺用の青酸カリ二人分を全部同志に与えた (友愛の証) ことを看護兵に告げたとき、深い悦をおぼえる。すなわち、友愛は悦とも結びつくのである。

マルロー小説の人物はすべて、心の奥底に苦悩を抱えていることは上述の通りであるが、それと同時に彼等は孤独であり絶望の淵におちいつている、といえるであろう。そして、悦がマルロー小説の随所にみられると同じように、希望も——たとえ悲劇的な希望であっても——ところどころに現われる。そのような絶望から希望への過程においても、友愛が何等かの役割を果すのではないかと考えられる。前稿で述べたように、小説 CH の Kyo は、その死にのぞんで、かたわらの同志達に深い友愛を感じるが、彼は、「現代で最も大きな意義、最大の希望が宿ることのために戦ったのだ」(CHpl) と自負しているからである。

これら二つの事項から、友愛は、苦悩と悦、また絶望と希望を内面的に結びつける一つの楔機になる、と図式的に結論するのは早計であろうが、少くともその方向は示していると思う。なお、ピコンは、マルローは友愛に解放を期待する。^⑩ と論じている。

以上、友愛の用語に基づいて問題を設定して考察したのであるが、友愛の縁語 camaraderie, amitié, communion もみられるので、それを参考までに^{⑫—⑭}に掲げておいた。しかし、友愛の問題は、そのよう

な言葉面にのみ限定されるべきではない。次項では、友愛の情景を述べることにする。

II

友愛に関する情景 scènes としては次の三つを指摘することができる。

1. 「看護兵の友愛」——捕虜収容所に当てられたシャルトル大聖堂で地面に横になってねむっていた「わたし」は、負傷した足をくすぐられてちくちくと痛み眼をさます。同じように捕虜の看護兵が包帯を交換してくれている。彼は、放棄された赤十字の薬箱から、「専断」で包帯、脱脂綿、オキシフルを取り出して、負傷兵達が眠っていようと目覚めていようとかまわず次々に手当をして廻るのである (NA p. 14)

2. 「パンを投げ与える婦人の友愛」——同じくシャルトル収容所の囲の柵へ捕虜達がどっと押し寄せ、鉄条網の向うから、袋をもった婦人が、歩哨を警戒しながら近づいて来る。焦慮感に疲れ、苦悩の色を宿し、王冠パンを柵ごしに投げながら、「お分けなさい！」と哀願するようにせきこんで叫ぶ。そのような婦人は一人だけでなく、また何度も訪れてくれるのである (NA pp. 20,21,22). この点に関しては、前稿で述べた魔法瓶を抱えてかけよってくる老婆、負傷兵にスープをすすめる老婆が思い出される。老婆達の接近には何等の障害も危険もなかったのに反して、上の例では鉄条網をへだて、歩哨を警戒しながら危険をおかして敢行される点に、より積極的な友愛の証が認められる。

3. 「敵兵救助の友愛」——ドイツ側の毒ガスで気絶したロシヤ兵の救助に示される友愛については、その一部はすでに述べ

た。ここではその情景を概観することにしよう。「わたしの父」はこの毒ガス攻撃を終始凝視し、自ら救助の手を差しのべる。まず、望遠鏡でのぞくと、敵のロシア軍陣地一帯は、その毒性のため、飛ぶ鳥をはじめあらゆる動物が姿を消し、草木に至るまで変色してしまっている。すなわち、1センチの生命も残っていない。疾走して行った馬が姿を没したまま立上る様子もない。近づいて行くと、誰かが気絶した兵を担いでやってくる。みると、担がれているのはロシア兵で、担いでいるのはドイツ兵である。そして、担ぐドイツ兵が、敵と同じように憎悪に燃えて、父をにらみつけている。そこにはもはや敵・味方の区別はなく、兄弟愛で固く結ばれた二人の人間がいるだけである。これに関しては、前項で述べた小説Eのタバコ、安全かみそりの刃、手紙の送達の三つの敵味方を越えた友愛の証が思い出される。しかしEの例では、味方を軽蔑する口実を敵に与えないという下心が働いていたのに対し、このNAの例では、そのような下心などは全くみられないという相違点が認められる。なお、敵味方を越えた関係としては、小説Eの中で、かつて敵側にあり四回も負傷したことのある狼犬が、心よく受入れられ、今ではManuelの側近になっている例を挙げることができる。

さて、ロシア兵を担いだドイツ兵が次々に帰って来る。そして早、彼等を放置するにしのびないという気持が支配的になる。現場に到着した父は、毒に侵されたロシア兵が傷一つ負わず、血の一滴も流していないのを見て、強く心を打たれる。「出血のない首吊りは不自然であり、不自然な

様相は恐怖感を与える」(E Ed. Gallimard p. 305)からである。小説CのKleinの死体には、大きく開いた傷口、顔の血の斑点、臉を切られた眼などが、拷問の激しさを物語っていた(C Ed. Livre de poche p. 187)のを想起すると、これら二つの様相はまさに対照的だといわなくてはならない。

そして、父は矢も楯もたまらなくなって、息のあるロシア兵はみつけ次第肩に担いで救い出さないとはいられなくなる。そのような直接的経験を意識することによって、父はさきに述べたように、「それは衝動であり、その中で苦悩と友愛が結びつく」ということを直感的に洞察するのである。そして、このような敵に対する友愛は、前稿で指摘した友愛の普遍性とは対照的に、友愛の深さ、大いさを示すものである。ここに、マルロー小説の友愛は、その横のつながりである「普遍性」においても、また縦の深さである「深奥性」においても、いよいよその極限に達するように思われる。

III

I項では友愛の用語を中心として論じ、II項では友愛の情景を述べた。そして、マルロー小説にみられる友愛は目的ではなくて方法であると論じた。さらに、苦悩から悦へ、絶望から希望への過程の中で、友愛が何等かの役割を果すのではないかということにも言及した。しかし、友愛が目的でなく同じように、悦にしても、希望にしても最終目的ではないといわなくてはならない。前稿の冒頭で述べた通り、マルロー文学の中心課題は「人間とは何か」という設問にほかならないからである。すなわち、「人間の概念の基礎づけになり得るような所与 donnée が果して存在するか」(NA p.

150) という設問である。

小説 NA の語り手「わたし」は、シャルトルの収容所で、毎朝、暁の不安な明りに浮び上る数千の影（捕虜達）をじっと見つめながら「これが人間だ」「C'est l'homme.» (NA p. 27) と考える。このことが最初の人間との出合であるが、まだその人間は影にすぎない。

「人間とは何か」の問題については、父と伯父の Walter との間に交される次のような対話 (NA pp. 89,90) を指摘することができる。その大要を示すと、

祖父が自殺した。そして、「私の決意は宗教に則って埋葬せられることである」という言葉を書きちらした反故が後で発見される。しかし、その文章は、「埋葬せられないことである」という否定文であったのにその否定の副詞が消されている。しかも、それは正式の遺書ではなく、その間の事情は秘密の域を出ない。そこで伯父は、「人間の本质は人間がかくしもつものだ」という。さらに、「人間は秘密のあわれな小堆積…」という伯父の言葉に対して、父は多少激して、「人間とはその人が為すところのものだ」と反論する。なるほど祖父の死の原因は秘密に鎖されている。それはともかくとして、重要なことは、祖父が自己の生に似つかわしい死を選んだその決意である。と続け、さらに父は、相手の言葉を受けて、「君のいうように、人間の本质はその秘密を越えて存在する」といいなおす。しかし父は、このことを理解したのは行動によってではない、と強調する。

もともと「わたしの父」は、冒険や革命に熱中する他の諸人物と同じように、行動人である。マルローの行動人はすべて友愛

で結ばれる。また「わたしの父」は、行動の経験を意識に変えて考えるという点で、他の小説人物の例外ではない。「人間は為すところのものだ」という彼の言葉は、彼の個人的経験を直接意識に変えた言葉と解すべきであろう。そして父はこのことを確信しているようにみえる。しかし、これで「人間とは何か」の問題が解決済みだとするには、この問題はあまりにも複雑であり哲学的である。他方、「人間の本质はその秘密を越えて存在する」という第二の発言は、方向を示したもので予感の程度に止まるものと考えられる。後で述べるように、人間の概念の基礎づけになりうるような所与は未だ見つからないからである。

I 項で述べた通り、父はドイツ兵が毒ガスに侵されたロシア兵を担いで帰るのをみて、「それは衝動であって、その中で苦悩と友愛が結びつく」と考えるが、それと同時に、彼の喉もとにせまるショックは、「人間の黙示」Apocalypse de l'homme (NA p. 243) の発見である。人間の本质はまだ判然としないが、そこには人間が暗黙のうちに出現しているのである。

父の「人間との出合」と自己の「人間との出合」をつき合せて考えるこの小説の最終ページで、語り手は、「今わたしが自己のうちに持っているものは、単純にして聖なる一つの秘密の発見である」という自覚に達する。つまり、「人間とは何か」という根本問題は、その第一歩を踏み出したに過ぎず、問題の大半はその後に持ちこされるのである。

いずれにしても、ここまで辿りつくその過程においては、本論の「友愛」がその要因の一つになっているように思う。(了)

註

- ① “Les Noyers de l’Altenburg” Gallimard NRF (1945) 略号 : NA.
- ② Misère de retrouver notre part fraternelle (p. 15)
- ③ au fond fraternel de la mort (p. 30)
- ④ Et mes oncles, (...), déliraient fraternellement (p. 42),
- ⑤ ,mon père y avait acquis très vite, sur les jeunes intellectuels, un prestige fraternel. (p. 47)
- ⑥ il (le grand artiste) nous les (ces destins) rend fraternels et révélateurs. (p. 113)
- ⑦ Il y avait dans tout le mouvement, (...), une fraternité maladroite et poignante. (p. 224)
- ⑧ Mon père, paupières serrées, tout son corps collé à ce cadavre fraternel (p. 233)
- ⑨ il s’agissait d’un élan bien autrement profond, où l’angoisse et la fraternité se rejoignaient (p. 243)
- ⑩ le chaos semblable à la forêt où posés et morts fraternels glissaient (p. 244)
- ⑪ les ombres fraternelles qui nous entourent s’évanouissent. (p. 272)
- ⑫ la camaraderie de combat, l’amitié... (p.64)
- ⑬ De la guerre, il aimait la camaraderie virile, (p. 159)
- ⑭ la communion dans l’engagement tenu au prix du sang, (p. 271)
- ⑮ “Les Voix du Silence” La Galerie de la Pléiade, Gallimard. 略号: VS.
- ⑯ Gaëtan Picon: “André Malraux” Gallimard. p. 33